



## 詩と神話 : William Blakeの場合

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 狐野, 利久 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10258/3325">http://hdl.handle.net/10258/3325</a>

# 詩 と 神 話

— William Blake の場合 —

狐 野 利 久

## Myth and Poetry

— A Note on William Blake —

Rikyu Kono

### Abstract

#### 1

Myth is generally regarded as something frivolous, nonsensical, or stupid, but, considering from a standpoint of psychoanalysis, we can say it is the language of the unconscious; it is the expression of the regions of our mind that think in a picture language of symbols, not in terms of words at all.

#### 2

Blake consciously had experienced the working of the unconscious in his mind. He said, "I met Socratis," "I talked with Jesus Christ," "Voltaire spoke in English," and so on. So people said of him that he was mad. Crabb Robinson, before seeing Blake, had also been sure of his madness, but when they met, he was surprised. In his diary he asks, "Shall I call him artist or Genius—or Mystic or Madman? Probably he is all."

#### 3

Mrs Kathleene Raine, one of the famous Blakeans, says: "Blake combined the symbolic imaginative genius of antiquity, and the psychological insight of modern man. In the latter respect, he was a hundred years in advance of his time; ..."

#### 4

Mark Schorer says that Blake had been qualified as mythmaker because of the following reasons:

- 1) his pride "Genius has no Error" was essential,
- 2) his imagination was habitually animistic, and

3) he saw things habitually in their metaphorical guises.

## 5

Then in what kind of myth did he try to write? To answer this question, we must consider of the influence of John Milton whom he loved throughout his life. I am sure that Blake tried to write the myths of *Paradise Lost* and *Paradise Regained* in his own style as Milton had written: *Paradise Lost* by Blake means the Fall of *Albion* (our Ancestor), which is caused by the disruption of the harmony of man's four elements—spirit or imagination, reason, emotion or passion, and the body—which are personified *Urthona*, *Urizen*, *Luvah* and *Tharmas*; *Paradise Regained* means the awakening of *Albion*, in other words, the activities of *Los*, the incarnation of *Urthona*, for the purpose of building *Jerusalem* not only in England's green & pleasant land but also in all nations as in the times of old.

## 6

His myth seems to have suffered from want of control. This is really caused by the facts that the working of the unconscious cannot be expressed objectively, insidely, and logically and that myth is written on a base of the dream-experience.

## 7

Blake says, "He who can be bound is No Genius," or "The True Man is the source, he being the Poetic Genius." From these words we can find not only the Oneness of God and Man but also the Oneness of Man and Poetry. The former causes his pride: "Genius has no Error"; the latter the writings of myth in poetic style. The Oneness of Man and Poetry means that our daily life must be due to poetry, that is, imagination, not to prose or reason.

## 8

T. S. Eliot says: "If his capacity for understanding of human nature, his remarkable and original sense of language, and his gift of hallucinated vision had been controlled by a respect for impersonal reason, for common sense, for the objectivity of science, it would have been better for him. ..." Blake says against Eliot, "Genius cannot be Bound; it may be Render'd Indignant & Outrageous."

It seems to me that such manner of Blake makes us aware of something innocent as a poet and, at the same time, makes us feel the limitations of Blake as a poet.

## (1)

吾々の意識が合理化されるにつれて、神話に対する吾々の考えというものも子供の頃の無邪気なおとぎ話か、或いはせいぜいよくて、古代人の素朴な

空想位にしか考えられなくなっている。特に、科学の発達をめざましい今日においては、神話というものはナンセンスな、馬鹿げたものとしてかえりみられないか、或いは、不合理であるからとうてい信じられないということで、一笑にされてしまう運命にあるようである。しかしながら、果して神話というものを、そのように考えて良いものなのであろうか。Richard Chase は、

The romantic fear that science may destroy myth betrays an acquiescence in the misinterpretation of myth which science sometimes gives us: namely, that it is frivolous or delicate nonsense.<sup>1)</sup>

(科学は神話を滅ぼしてしまうかもしれないという实际的でない憂いは、科学が時折吾々にもたらす神話についての間違った解釈、すなわち、神話というものは、つまらない、或は巧妙な、戯言であるという間違った解釈を黙認することになる。)

といい、神話に対する吾々の間違った考え方を批判している。又、Francis Fergusson は、

...unfortunately the student of literature cannot get along without "myth". It is too evident that poetry, to say nothing of religion, philosophy, and history, are akin to mythopoeia. Drama, the lyric and fiction live symbiotically with myths, nourished by them, and nourishing their flickering lives.<sup>2)</sup>

(不幸にも、文学の研究は神話をとりのぞいてはなりたたない。詩や、宗教は云うに及ばず、哲学や歴史は、神話を作り出すということと類似性があるということは、あまりにも明白なことである。演劇も、敘情詩も小説も、神話と共存共栄においてあるのであって、それらは神話によって生まれ、又神話のか細い命を養っているのである。)

と云い、文学の研究においては、神話を無視することの出来ないことを吾々に教えている。

(2)

Sygmund Freud (1856-1939) が、神話は古代民族の夢であるとのべたこと

は、よく知られていることである。Erich Fromm も、

(Freud) helped the understanding of the myth by inaugurating an understanding of symbolic language on the basis of his interpretation of drama.<sup>3)</sup>

((フロイドは) 夢の解釈にもとづいて象徴された言語の解釈の仕方を考え出すことによって、神話の理解を助けたのであった。)

といているように、Freud は精神分析 Psychoanalysis による夢の解釈にもとづいて、神話を解釈しようとしたのであった。ところが彼は、神話においても夢の場合におけると同様、過去の時代の非合理的、反社会的な衝動の表現ということのみに解釈の重点をおいたがために、この点に反対する意見が数多くあるようであるが、しかし、神話を理解する道をつけてくれたという点において、彼の功績は大きいといわねばならないであろう。

Freud、及び、彼の後継者たちが明らかにしたところによると、人間の精神には、全然言葉という手段によらず、象徴 (symbol) という絵言葉 (picture language) によって、物事を考える領域が存在するということである<sup>4)</sup>。それはどこにあるのかと云うと、吾々の意識の深層であって、通常、無意識とよばれている領域である。そうして、吾々が日常用いる言葉というものは、Blake 研究者の一人である Kathleene Raine 女史の言葉をかりれば、「意識的思想の完成された道具 (the perfected instruments of conscious thought)<sup>5)</sup>」にしかすぎないのであるが、無意識の領域において働らく絵言葉という象徴的な形象 (symbolic form) は、吾々の意識にのぼらない意識、すなわち、無意識の動きのあらわれであって、吾々が夢をみるときその形象の一部をみるのが可能なのである。しかしながら、通常吾々は、「言葉による思考の習慣が久しい以前から出来上っているがために、象徴というものを十二分に使用するすべは、大部分失われてしまっている (the art of using symbols to their full potency has, with our long-established habits of verbal thought, been largely lost)<sup>6)</sup>」がために、意識的に無意識の動きが経験されるということが、少なくなってしまうということである。ところが、

What in most men is latent, is consciously experienced by visionaries

and imaginative poets of the stature of Shakespeare, Coleridge, or Blake.<sup>7)</sup>

(大部分の人にとっては、内にひそみかくれているものが、シェイクスピア、コールリッジ或は、ブレイクのような偉大な幻想家や、想像的詩人の場合には、意識的に経験される。)

ということである。従って、このような精神分析の立場から考えてみると、

…the myths of primitive races, and of our own antiquity, move far more in this non-linguistic, symbolic layer…than in the verbal. Ballad and legend and fairy-tale deal almost wholly in this non-linguistic symbolism, …<sup>8)</sup>

(原始民族や吾々の祖先たちの神話は、言葉の層よりも、非言語的象徴の層の中で行動するのである。バラッド、伝説それに、おとぎ話というものは、ほとんどすべて、この非言語的象徴とかかわっているのである。)

と Raine 女史が説明しているように、結局、神話というものは、吾々の記憶から忘れ去られてしまっている象徴という絵言葉ということに定義されるようである。そうして、Blake の場合には、彼の心の内奥にある象徴という絵言葉が意識的に経験されるがままに、丁度ギリシャ人が神々について書いたように、書き、又、人にも語ったのであったということが出来るのである。

### (3)

Blake は意識にのぼらない意識(即ち無意識)の働きというものを、幼少の頃から直接経験し、大人になっても決して失うことがなかった。幼少の頃の有名な話として、年老いた神が窓からのぞいているのを見たとか、天子が木の枝に鈴なりになっているのを見たとかという話が、彼には色々あるが、大人になってもそのような話は、数多く伝えられているのである。Henry Crabb Robinson の日記の、1825年12月10日のところをみると<sup>9)</sup>、

…彼が「私の幻像」と云ふ場合、彼はあたりまへな、別に誇張のない調子で話した。まるで誰でも理解し、別に気かけないごく普通な事を話すのと同じであった。又同じ調子で彼は屢々「精霊が私に告げた」と話

した。私は折を見計らって、貴方はソクラテスが使ったのと同じ言葉を使ってゐる。貴方の精霊とソクラテスの精霊との間には、何か似通ひがあるかと尋ねた。「吾々の容貌が似てゐる様に似てゐる。」彼は途切れて又かう付け足した。「私はソクラテスだ。」かくして又それを訂正するかの様に、「兄弟の様なものだ。私は彼と会話した事があつたにちがひない。同じ様にイエス・キリストとも話しあつた。私はそれ等の人達と一緒にゐた事を臚ろげに記憶してゐる<sup>10)</sup>」

と Robinson は記している。又 Milton が Blake の Imagination の世界にあらわれて、自分のかいた「失樂園 (Paradise Lost)」によって迷わされることのないように注意したという話も残っているが<sup>11)</sup>、Blake が見た Milton について、Robinson は、

彼はミルトンが彼に現はれた話をしたので、私は彼(ミルトン)が果して版畫の肖像に似てゐるかどうかを尋ねた。「全く同じだ」と彼は答へた。何才位の齡で現はれたのですか。「色々の齡でだ。——或時は非常な老人だった。」彼はミルトンが或時は古典的な無神論者の一種であり、又ダンテが今は神と共にゐると云ふ事を話した<sup>12)</sup>。

と日記に記している。このように普通の人と変わった、奇異に思われるようなことを Blake は云つたので、人々からだんだん相手にされなくなり、遂には狂人視されるようになっていったのであるが、しかし

幻像の力に就ては、彼はそれをごく幼少の折から持つてゐたと話した。彼の考へでは凡ての人がそれを分有してゐる。だがそれを養はないばかりに失つて了ふ<sup>13)</sup>。

と Robinson に話した Blake にしてみれば、

If the doors of perception were cleansed every thing would appear to man as it is, infinite<sup>14)</sup>.

(もしも知覚の扉がきよめられるならば、すべてのものはありのままに無限にみえるであろう。)

という言葉からもわかるように、彼の幻覚はごくあたり前のことであつたの

である。従って狂人扱いされることは堪えられなかったとみえて、

That it no longer shall dare to mock with the asperation of Madness  
Cast on the Inspired by the fame high finisher of paltry Blots In-  
definite, ...<sup>15)</sup>

(欠点のないことを誇りとしている無気力なものによって、靈感を受けたものを気狂いと中傷し、嘲けることをやめさせるように、…)

願ったのであった。しかし Renaissance 以来人々は自我に目覚め、物事を理知的に合理的に考えるようになっていったので、Blake の云うことは理解されず、1833年に Paris の「ルヴュ・ブリタニク」誌(第三輯、第四巻、183～186頁)に掲載された記事などには、Blake が London の南東部にある有名な精神病院に 30年間も入れられていたことになってしまったのである<sup>16)</sup>。そうして、このことが事実無根のことであるということが解明されたのは、やっと今世紀に入って、1927年に出た Mona Wilson の *The Life of William Blake* によってであるから、Blake は長い間誤解されていたわけである。

そのようなわけであるので、今世紀になって Blake が急に脚光をあびるようになったのも、

Why wilt thou Examine every little fibre of my soul,  
Spreading them out before the sun like stalks of flax to dry?  
The infant joy is beautiful, but its anatomy  
Horrible, Ghast & Deadly; nought shalt thou find in it  
But Death, Despair & Everlasting brooding Melancholy<sup>17)</sup>.

(なぜお前は私の魂の小さな繊維の一つ一つを調べて  
丁度亜麻の茎をかわかすよに太陽の前にひろげておくのか?  
みどり子の喜びは美しいが、その分析の結果は  
おそろしくひどいものである。お前は死と絶望と  
永遠にふさぎ込むゆううつ以外に、何物も見出さぬことであろう。

と Blake が合理的な、科学的な思考を絶対視する考え方を批判した意味が、やっと 20 世紀になって、人間性の喪失とか、人類の危機とかが叫ばれるようになって、はじめて顧みられるようになったからであろうし、又、二つには、



Freud の精神分析の結果、深層心理学の分野の研究が進んで、意識にのぼらない意識の流れについての研究が盛んになって、Blake の幻覚があらためて注目されるようになったからでもあろう。従って、仏人の Georges Bataille の言葉をかりれば、

「ブレイクは<sup>ヴィジヨネール</sup>幻想家であったけれども、その<sup>ヴィジョン</sup>幻に現実味を帯びさせようとはしなかった。つまり、彼は別に気ちがいではなかったが、ただ彼は、その<sup>ヴィジヨネ</sup>幻をごく人間的なものとして見て、それが人間精神のきわめて自然なあらわれだと考えていたのである。」<sup>18)</sup>

ということになるのである。全く、Raine 女史の云うごとく、

Blake combined the symbolic imaginative genius of antiquity, and the psychological insight of modern man. In the latter respect, he was a hundred years in advance of his time; ...<sup>19)</sup>

(ブレイクは古代人のもっていた象徴的想像的天才と、現代人のもっている心理学的洞察とを結合した。後者の点においては、彼は 100 年だけ時代に先んじていたのである。)

といえよう。

#### (4)

Mark Schorer はこのような Blake を神話作家 mythmaker としての資格が十分あったとのべている<sup>20)</sup>。彼によれば、第一に Blake の「天才には間違いなし (Genius has no Error.)」という pride は、神話作家として必須のものであること、第二に彼の Imagination は習慣的に animistic であったということ、そして第三に metaphor は神話の必要かくべからざる伝達手段 indispensable vehicle であるが、Blake は幻覚によって一切のものを metaphor の装い中に見ることができたということの三つをその理由としてあげている。彼のあげたこのような理由は全く適切であると私は思うのである。

Genius has no Error と Blake が云う時の、Genius という言葉には God という意味がある。例えば、

The true Man is the source, he being the Poetic Genius<sup>21)</sup>.

(真人はあらゆるものの根源であり、詩的天才である。)

という Blake の言葉があるが、この場合の the true Man は Man と同様に使われることがあって、

Man is All Imagination. God is Man & exists in us & we in him<sup>22)</sup>.

(人間はすべて想像である。神は人間であって吾等の心の中に住み給い、又吾等も神の御心の中に住むのである。)

は、明らかにその例である。従って Man=God ということから、Genius=God ということが云い得るわけである<sup>23)</sup>。又、

He who can be bound down is No Genius. Genius cannot be Bound; ...<sup>24)</sup>

(自己を束縛するものは天才ではない。天才は束縛されるべきでない。)

という言葉から、Genius は理性によって縛られ拘束されることがないので、

We live as One Man; for contracting our infinite senses  
We behold multitude, or expanding, we behold as one,  
As One Man all the Universal Family, and that One Man  
We call Jesus the Christ, and he in us, and we in him  
Live in perfect harmony in Eden, the land of life, ...<sup>25)</sup>

(吾々は全一なる人として生きている。吾々は無限の感覚を縛る時そこには分離があるが、それを放つ時吾々は宇宙の一家族としての全一なる人を見るからだ。その全一なる人こそ吾々はイエス・キリストと呼んでいる。彼は吾々に在り、又吾々は彼に在り、生命の地エデンに完全なる調和を得て生活している。)

という、いわば神と一如であるという Imagination の世界に住することが出来るのである。このように、天才(=神)というものは、理性によって拘束され、理性によってとらえらるべきものでなく、理性から解放されてあらねばならないのであって、解放される時

For all are Men in Eternity, Rivers, Mountains, Cities, Villages,  
All are Human, ...<sup>26)</sup>

(永遠界においてはすべて人間、河も、山も、町も、村も、すべて人間である)

という animistic な心境となり、草木の一つ一つに神の愛を感じ、小鳥の鳴声に神の声をきき、小羊の姿に神の姿を見ることが出来るのである。Blake が、Felpham に滞在していた頃、妖精の葬式 (a Fairy's Funeral) を見たという話も、又前述の、ソクラテスと合い、キリストと語った等という話も、実は彼の Imagination, 即ち、神人一如の心境から発した言葉なのである。従って、天才には間違いなしという pride も、神人一如の自覚があったればこそと云えよう。

更に又、Blake の Imagination の世界は、理性の束縛から解放された世界であるが故に、時間空間を超越した世界でもある<sup>27)</sup>。従って、Imagination においてみられる世界は、象徴という絵言葉であらわされることになるのである。ここにおいて、metaphor が必要となってくるわけである。Blake の The Marriage of Heaven and Hell の中のべられてある Memorable Fancy はその良き例であろう。特に、Memorable Fancy の 4 はすばらしいものであって、Mark Schorer のいう、metaphor の装をもって、「古い理念体系や dogma にしばられたり、法則に拘束されたり、習慣にとらわれたりしてはこの世を渡って行けないし、又そのようなあり方は、第一、生きた生命をもっている宗教を骸骨にしてしまうことになる」<sup>28)</sup>ということ、生き生きと吾々読者に伝えてくれている。

### (5)

では、一体 Blake はどのような種類の神話を書こうとしたのであろうかということになるが、この問題を解くためには、Blake が生涯愛した Milton を抜きにしては不可能であるように思われる。

Blake が Milton の影響を多分に受けているということについては、S. Foster Damon や Denis Saurat 等 Blake 研究家の等しく指摘するところである。Blake が予言詩 Milton を書いたということも、端的にこのことを物語っていると思われる<sup>29)</sup>。Damon は Blake の *Songs of Innocence* と *Songs of Experience* を Milton の *L'Allegro* と *Il Penseroso* に対比させ、*The Book*

of *Thel* は *Comus* の一種の rewriting であるとし、又、Milton の *The Doctrine and Discipline* は Blake の *The Visions of the Daughter of Albion* の源をなし、*Paradise Lost* は Milton を書かせることになったというようにみている<sup>30)</sup>。Mark Schorer は、

He (=Blake) took the Christian mythology as Milton had employed it, with the emphasis on the creation and the resurrection—paradise lost and paradise regained—and with the help of certain semimystical writings and his own highly personal responses to the leading ideas of his age (responses capable of extraordinary transvaluations), manipulated it to his inclusive purposes<sup>31)</sup>.

(彼(=ブレイク)は創造と救済、即ち失樂園と復樂園とを強調するために、ミルトンが採用したようにキリスト教の神話をとり入れた。そうして或る半ば神秘的な書き方と、彼の時代の指導的な考えというものに彼自身が非常に個人的ではあるが反応するという(即ち途方もない価値変更ということをしかねないような反応ぶり)によって、彼の総括的な目的のためにキリスト教の神話を、たくみに取り扱ったのであった。)

といっているが、Blake には Milton のむこうをはって、Blake 流の失樂園や復樂園を書こうとしたことは確かなようである。そうして、この場合

We do not want either Greek or Roman Models if we are but just & true to our own Imaginations, ...<sup>32)</sup>

(もしも吾々が吾々自身の想像に正しく真実でありさえするならば、ギリシャの模範もローマの模範もいらぬであろう。)

といっているように、ギリシャやローマ神話というものにはよらずに、ただ、彼の Imagination の命ずるままに筆を走らせているので、彼の神話は統一がとれておらず、そのためにはなほだ難解である。だが彼の予言詩を通じて、彼の意としたところを説明的にのべるとすれば、恐らく次のようになるであろう。

Blake によれば、吾々の本来的なあるべき姿というものは、前述のように、神人一如の境地に住している姿ということになるのであるが、具体的に云うと、四性 (Four Senses) の調和ということである。即ち、人間には、Imagi-

nation, Reason, Passion, Instinct の四性があるのであるが、

The Four Senses are the Four Faces of Man & the Four Rivers of the Water of Life<sup>33)</sup>.

(四性は人間の四つの顔であり、生命の水をたたえた四つの河である。)

この四性が常に均整を保って調和的に働く時

Four Mighty Ones are in every Man ; a Perfect Unity  
Cannot Exist but from the Universal Brotherhood of Eden,  
The Universal Man, to whom be Glory Evermore. Amen.<sup>34)</sup>

(四つの偉大なる性が一切の人間にある。その完全な統一は  
エデンの宇宙の友愛においては存在しない。  
宇宙的な人間、その人にとこしえに榮光あれ。)

といわれ、人は楽園の幸福を受けることができるのである。このように、楽園にあって、四性を完全に統一している人を、Blake は Albion と名づけ、人類の祖としているのである<sup>35)</sup>。そうして、この Albion は、世界が正しい姿で存在していた時、アトランティック大陸に住んでいたという。

He is Albion, our Ancestor, patriarch of the Atlantic Continent, whose History Preceded that of the Hebrews & in whose Sleep, or Chaos, Creation began<sup>36)</sup>.

(彼はアルビオンで、吾々の先祖であり、又アトランティック大陸の祖先でもある。彼についての歴史はヘブライ人の歴史よりも古い。そしてアルビオンの眠り、即ちこんとんの時、創造が始まったのだ。)

ところが、このように、永遠界に住み、喜びの中に生活していた Albion も、楽園を喪失して、長い眠りに落らねばならない時がやって来た。統一されていた四性の調和が破綻 disruption してしまったのである。どうしてそのような調和が破綻してしまったのかということについては、Blake のはっきりした説明がないのであるが、J. G. Davies は「人間の心理についての彼の解釈を打ちたてんがための一つの骨組 (a framework around which to build his interpretation of man's psychology) として the doctrine of the Fall を

用いたにすぎない」<sup>37)</sup>と云っているので、単なる四性の間の conflict が disruption の原因と解してよいようである。

Blake は、Urthona<sup>38)</sup>, Urizen<sup>39)</sup>, Luvah<sup>40)</sup>, Tharmas<sup>41)</sup> の四人の神をつくり、Urthona には Imagination を、Urizen には Reason を、Luvah には Passion を、そして Tharmas には Instinct を、それぞれの神の属性とした。又彼らを方位づけして、Urthona を北、Urizen を南、Luvah を東、Tharmas を西にそれぞれ配するのであった。

Four Universes round the Mundane Egg remain Chaotic,  
One to the North, named Urthona: One to the South, named Urizen:  
One to the East, named Luvah: One to the West, named Tharmas;  
They are the Four Zoas that stood around the Throne Divine.<sup>42)</sup>

(四つの宇宙が地の卵殻のまわりにこんとんとしてある。

その一つは北にあり、アアソナと云う。一つは南にあって

ユリゼンと云う。一つは東にあってルヴァと云う。一つは

西にあってサマラスと云う。彼らは神の座のまわりに立つ四つのゾアである。)

これが normal position にある 4 つのゾア (四性)<sup>43)</sup>、即ち、Urthona, Urizen, Luvah, Tharmas の姿なのである。彼ら 4 人の神々は、このように方位を守り、割りあてられた職分を發揮しておればよいのに、例えば、Urizen が野心を起して、Luvah に自分の領有する南の国の支配を暗黙の中に認める代りに、自分が Urthona の領有する北の国を、Urthona にとって代って支配することを認めさせようとしたり<sup>44)</sup>、或いは、

But when Luvah assum'd the World of Urizen to the South  
And Albion was slain upon his mountains & in his tent,  
All fell towards the Center in dire ruin sinking down.<sup>45)</sup>

(しかしルヴァが南のユリゼンの国を犯し、

アルビオンが彼の山上、彼の天幕の中で殺された時、

すべてはすさまじく破滅し、中心にむかって転落するのであった。)

とあるように、Luvah が南の Urizen の国を犯すということが起ったりした

がために、四性の間の調和が破れて、Albion は樂園を喪失するのであった。Davies は、

Blake asserted that the Fall was due to each one of man's four elements—to reason, to the emotions or passions, to the body, and to the spirit—but these last two are mentioned with less detail or elaboration, whereas the first two receive fuller treatment and are interconnected.<sup>46)</sup>

(樂園喪失は人間の四つの要素、即ち理性、情意又は感情、肉体それに精神の、それぞれの要素に起因しているとブレイクは主張したが、最後の二つの要素についてはそれ程細かに念入りにのべられていないけれども、最初の二つの要素については十分に取扱われ、又互に関係づけられている。)

と云っているが、確かに Blake の神話においては、Urizen と Luvah とが互に全世界を支配しようとして conflict しているさまに、Blake の stress がおかれているようである。吾々の日常の生活というものを考えてみると、吾々は理性と感情とによって動かされ、支配されているようなものであるから、Blake が特にこの二者を取り上げて stress をおいたとしても別に不当な感じはしない。それ故例えば、Urizen が Urthona にとって代って此の世を支配しようとしたことも、吾々特に、批判的理性に目覚めている現代人は、「おれたちが神を殺したのだ——お前たちとおれがだ！ おれたちはみな神の殺害者なのだ！ (Wir haben ihn getötet—ihr und ich! Wir alle sind seine Mörder!)」<sup>47)</sup>と叫んだ Nietzsche の言葉を引用するまでもなく、神の代りに自分を神の座にすえつけ、自分をよりどころとしている人達と云うことが云えるから、理知的に合理的に考えようとする現代人のあり方を、この場合の Urizen は象徴していると考えられるし、又、吾々が discussion している時に、感情的になってしまうと收拾がつかなくなることがよくあるが、これは正しく Luvah が勝利を得た姿であると考えて差しつかえないわけである。Urizen は永遠の世界においては Prince of Light とよばれていたことからわかるように、輝かしい流動状態にある知性を意味していたのであるが、四性の調和が破れて、Luvah におびやかされるようになると、次第に硬化して

しまつて、何でも彼でも冷たい理念とか理性とかによって拘束しようとする性格に変わってしまったから、Blake の絵では頑固な老人の姿であらわされている。Blake は *The Marriage of Heaven & Hell* の中で、

All Bibles or sacred codes have been the causes of the following Errors :

1. That Man has two real existing principles: Viz: a Body & a Soul.
2. That Energy, call'd Evil, is alone from the Body; & that Reason, call'd Good, is alone from the Soul.
3. That God will torment Man in Eternity for following his Energies.<sup>48)</sup>

(あらゆる聖書及び聖典は、次の謬見を醸し出す原因となつてきた——

- 一. 人間は二つの真実な存在原理、即ち、肉体と精神とを持つと云ふ事。
- 二. 情熱は悪と呼ばれて、ただ肉体のみから生じ、理性は善と呼ばれて、ただ精神のみから生ずると云ふ事。
- 三. 人若し情熱の命ずる所に従へば、神は永劫に人間を呵責するであらうと云ふ事<sup>49)</sup>。

とのべているが、理性をもって物の尺度とし、理性によって自分や他人を律していこうとしたり、或いは自己の中に渦巻く情熱 energy までも理性によっておさえつけようとしていたりしている人の心の中というものは、Urizen と Luvah との間の conflict で十分説明されるであろう。

このようなことで、Albion が楽園を喪失し、物質界へ転落してしまうのであるが、そのために Albion の美しい半身である Jerusalem は Albion から separate してしまうことになる。もともと、

In Eternity Woman is the Emanation of Man; she has No Will of her own. There is no such thing in Eternity as a Female Will, ...<sup>50)</sup>

(永遠界においては女性は男性の流出である。彼女には彼女自身の意志というものは無い。永遠界においては女性の意志といったものはないのだ)

ところが、Albin の転落によって Jerusalem は自分の意志を持つようになり、



遠くユダヤまで流浪することになる。一方 Urthona は、Albion の転落後、姿をかえて Los となり、Urthona の幻像として活動するのであるが、Los の活動には、Blake 自身の姿が感じとられるのである。彼は楽園喪失の悲運から Albion を救うため、Albion の Emanation である Jerusalem を England へつれもどそうとする。

Return, Jerusalem, & dwell together as of old! Return,  
Return, Albion! let Jerusalem overspread all Nations  
As in the times of old!<sup>51)</sup>

(帰っておいで、イエルサレムよ、昔のように一しょに住もう！  
帰っておいで おおアルピオンよ！ 昔のようにイエルサレムが  
すべての国々に広がるようにしよう！)

そのため、

I will not cease from Mental Fight,  
Nor shall my Sword sleep in my hand  
Till we have built Jerusalem  
In England's green & pleasant Land.<sup>52)</sup>

(私は決して心の戦いを止めないであろうし  
私の刀を手の中で眠らせないであろう  
イギリスの緑のたのしい国土に  
イエルサレムを建てるまでは。)

この詩の一節は、詩人としての Blake の使命をのべたものであろうが、神話においては Los の使命をのべているということになる。Los は blacksmith であるので、鎔炉、金敷、ハンマー等による鍛造、即ち creation (創造) によって、すべての誤を本来のあるべき姿にもどそうと努力するのである。そのため、例えば、Urizen を金敷できたえたりする。

Los の努力の結果、すべてがあるべき姿にもどり、Albion も転落の眠からさめて立ち上がった時、the Universal Humanity なるイエス・キリストが Albion のそばに立つのである。ところが、

…the Divine Appearance was the likeness & similitude of Los.<sup>53)</sup>

(神の風貌はロズの似姿であった。)

といわれているので、Los は又、キリストと同一視されているわけである。ここにおいて Los は本来の Urthona の姿にもどり、Albion の復樂園がなりたつのである。

以上が Blake の予言詩を通じて考えられる Blake の失樂園、復樂園のあら筋であるが、前述の如く、中々複雑であるので説明出来ないところが多い。なぜ筋に統一がないのかというと、Witcutt も、

Blake's poetry is the story of the soul; his life-drama took place within.<sup>54)</sup>

(ブレイクの詩は魂の物語である。彼の人生劇はその中で起った。)

といっているように、或時は感情的となり、或時は理知的となり、或時は神を讃仰するといった Blake 自身の姿を、Imagination, Reason, Passion, Instinct のそれぞれの動きということで、内面的にとらえて描きあらわそうとしたことに起因していると思われる。その場合人間の無意識の動きというものは、時間空間を超越しているから、象徴という絵言葉によって表現されねばならないし、又、人間の無意識の動きというものは、Imagination, Reason, Passion, Instinct の4つだけでは十分にあらわせないため、Blake は色々な属性をもった神々を次々につくり上げねばならなくなったということも、彼の神話に統一を欠く要因となってしまっているようである。そのためあまりにも神々をつくり過ぎて収拾がつかなくなり、Blake 自身も、わからなくなってしまったのではなからうかと疑いたくなる程であるが、本人自身は、

What are the Natures of those Living Creatures the Heavenly Father only Knoweth: No Individual knoweth, nor can know in all Eternity.<sup>55)</sup>

(これら生き物の性質が何であるかを知っているのは天にまします父のみである。如何なる人も知らないし、又永遠に知ることは出来ないであらう。)

と誤魔化してしまっている。そこでこのように統一がとれなくなってしまっ

た理由は、Blake は正当な教育を受けていなかったからだとして彼の無教育のせいにする人もでてくるのであるが、私はむしろ、人の心の動きというものを内面的にとらえて描写することが出来る程、人の心の動きというものは単純なものではないということ、彼の神話の不統一ということが real に立証していると考えたい。そうして Lafcadio Hearn も、「The Value of the Supernatural in Fiction」と題する論文の中で<sup>56)</sup>、超自然的なるもの、即ち精霊、幽霊或いは神といったものについて何か書く時には、夢の経験にもとづいて書いた方がよいといったことをのべているが、Blake の神話を読む時には、吾々読者の方が夢の経験にもとづいて、或いは夢見ているような気持で読む方が無難である。そういう意味で

It is not possible to read the Prophetic Books merely as exercises in the use of language; on the linguistic level, except for some fine passages, they are disappointing, as compared with the early lyrics; they must be read as myth.<sup>57)</sup>

(単に言葉の使い方の練習として「予言書」を読むことは不可能である。はっきり云えば、いくつかの美しい箇所をのぞいては、初期の絳情詩と較べて、吾々の期待を裏切るものがある。「予言者」は神話としてよまねばならない。)

とのべている Raine 女史の言葉は、正しく、Blake の神話を読む吾々の心得を示しているものと思われる。

## (6)

Blake の神話を概観すると以上のようなことになるのであるが、そのような神話を Blake がなぜ散文でなく韻文、即ち詩で書いたのかということについて考えてみることにする。そのため、前に引用した Blake の、

He who can be bound is No Genius. Genius cannot be Bound.  
や、

The true Man is the source, he being the Poetic Genius.

という言葉、もう一度考察してみると、前述の如く、神・人一如の思想を

引き出すことが出来るのであるが、その外に詩的天才 (Poetic Genius) というのは、外ならぬ *poésie* のことであるので、これらの言葉から、詩と人間とは一如であるという Blake の考えも見出されるのである。

詩と人間とが一如であるということは、吾々の日常の生活を散文ではなく、詩 *poetry* の手に返えしてやるということである。それは、具体的に云えば、Wordsworth が虹が美しく空にかかっているのを見て胸をおどらせている子供のようでありたいと願ったように、吾々も、Innocence の世界に住む子供のように、美しいものに心を動かす人になるということ、即ち、どんなものにも深い感動を覚える人になるということである。吾々は、何事にも感動するということが必要であって、感動するたびに吾々は人間として生まれ変わるものである。前述の如く、Blake が Imagination の世界において、Socrates や Jesus Christ に会い、Milton と語ったということは、彼らから受けた感動が何如に大きかったかということ、しかも、その感動が何時もたび重なって起ったということを示す事柄である。

詩人というものは、いつもそのような感動的経験を持ち、それを表現せずにはおれない人達である。そうして、Blake の場合は、詩人は又予言者 prophet でもあると信じていたので<sup>58)</sup>、彼の作品、特に予言書といわれる詩集のどれもが、宗教的な感動の表現としての神話とならざるを得なかったのである。

## 附 記

詩人は一般に、感動的経験をそのまま表現することはなく、その経験を一層効果的に組み立てなおして、不要なものは捨て、必要なものは加えて、全体の統一をはかるものである。そこに適格に表現するための技術が必要となり、かくしていく中に、その作品が芸術 *art* にまで高められてゆくのである。ところが Blake の予言書の場合は、感動的経験をほとんど生のまま表現していると思われるところもあって、それが、前述の如く、全体的統一を損なう原因に考える人もいる様である。それ故、彼の抒情詩はすばらしいが、予言書の方は、芸術的にみて零であるという批評もなりたつのであるが、そのような批評は、いささか Blake には酷なような気はするにしても、あながち不当だとも思えない。むしろ、T. S. Eliot が Blake について、以下の如く述べた言葉の

方が、きわめて穏当で、私には好感の持てる Blake 評価であるように思える。

Blake was endowed with a capacity for considerable understanding of human nature, with a remarkable and original sense of language and the music of language, and a gift of hallucinated vision. Had these been controlled by a respect for impersonal reason, for common sense, for the objectivity of science, it would have been better for him. What his genius required, and what it sadly lacked, was a framework of accepted and traditional ideas which would have prevented him from indulging in a philosophy of his own, and concentrated his attention upon the problems of the poet. Confusion of thought, emotion, and vision is what we find in such a work as *Also Sprach Zarathustra*; it is eminently not a Latin virtue. The concentration resulting from a framework of mythology and theology and philosophy is one of the reasons why Dante is a classic, and Blake only a poet of genius. The fault is perhaps not with Blake himself, but with the environment which failed to provide what such a poet needed; perhaps the circumstances compelled him to fabricate, perhaps the poet required the philosopher and mythologist; ...<sup>59)</sup>

(ブレイクは人間というものに対する相当な理解と、言葉と言葉の音楽に対する全く独特な感覚と、各種の幻想に見舞われる才能を持っていた。そしてそれが一般的な理性、常識、及び科学の客観性を尊重することによって統制されていたならば、彼にとってずっとよかった筈なのである。彼の天才が必要として、そして不幸にも、それなしですまさなければならなかったのは、誰でもが認めている伝統的な観念の枠で、それがあれば彼は自分で哲学を作る仕事に耽ったりせずに、詩人としての各種の問題に集中することが出来たのだった。思想や、感情や、幻想の混同は、「ツェラツストラ」にも見られるもので、こういうことはラテン民族にはない。ダンテは神話と、神学と、哲学の枠があるために自分の仕事に集中することが出来たので古典になり、それがなかったのでブレイクは天才的な詩人でしかなかった。それ故に、これはブレイク自身が変わったのよりも、寧ろ詩人が必要としたものを与えなかったその環境に

責任があるのかも知れないので、ブレイクは止むをえずにあり合わせのもので間に合し、それで詩人であるだけでなく哲学者・神話学者を兼ねたのだということも考えられる云々<sup>60)</sup>

しかし、Imaginationの世界に遊ぶBlakeにしてみれば

He who can be bound down is No Genius. Genius cannot be Bound; it may be Render'd Indignant & Outrageous.

“Oppression makes the Wise Man Mad.”

SOLOMON<sup>61)</sup>

(自己を束縛するものは天才ではない。天才は束縛されるべきではない。それは忿怒と激昂とを与えるばかりである。

「抑圧は賢者を狂者にする」

ソロモン)

と云い切り、又、

Abstract Philosophy warring in enmity against Imagination (Which is the Divine Body of the Lord Jesus, blessed for ever), ...<sup>62)</sup>

(抽象的な哲学は(永遠に祝福される神イエスの聖体なる) 想像に敵対するものである)

と云ってもいるので、やはり Eliot の云うように、controlされるということは、Blakeにしてみれば、断じて承服出来ない話であったのである。このような Blake の態度には、何か詩人の持つ Innocence なものを感じ、心引かれる思いがするのであるが、同時に、やはり Blake の詩人としての限界も見るとような思いもするのである。

(昭和43年4月30日受理)

註

- 1) Richard Chase: *Notes on the Study of Myth*, in *Myth and Literature*, ed. John B. Vickery, Univ. of Nebraska Press, 1966, p. 68
- 2) Francis Fergusson: “*Myth*” and the *Literary scruple*, in *Myth and Literature*, ed. J. B. Vibkery, p. 139
- 3) Erich Fromm: *The Forgotten Language*, Evergreen Edition, Grove Press, 1957, p. 196

- 4) Kathleen Raine: *William Blake*, Bibliographical Series of Supplements to 'British Book News', The British Council, 1951, p. 27  
W. P. Wittcutt: *Blake; A Psychological Study*, Kennikat Press, 1964, p. 18  
B. Blackstone: *English Blake*, Archon Books, Connecticut, 1966, p. 59
- 5) Kathleen Raine: *William Blake*, p. 26
- 6) *Ibid.*, p. 27
- 7) *Ibid.*, p. 27
- 8) *Ibid.*, p. 27
- 9) Robinson の日記の原文が手許にないので、止むなく柳宗悦氏の「ブレークの言葉」から、柳氏の訳文をそのまま使わせていただくことにした。
- 10) 柳宗悦: ブレークの言葉, 叢文閣, 大正10年, pp. 76-77
- 11) *Ibid.*, pp. 87-88  
S. Foster Damon がこの箇所を Robinson の日記から引用しているので下記にかかげる。

'I saw Milton *in imagination*, and he told me to beware of being misled by *Paradise Lost*. In particular he wished me to show the falsehood of his doctrine that the pleasures of sex arose from the fall. The fall could not produce any pleasure.' (S. F. Damon: *William Blake: his Philosophy and Symbols*, Petre Smith, 1958, p. 175)

- 12) 柳宗悦: ブレークの言葉, p. 88
- 13) *Ibid.*, p. 88
- 14) Geoffrey Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, The Nonesuch Press, 1957, p. 154 (*The Marriage of Heaven & Hell*)
- 15) *Ibid.* p. 533 (*Milton*)
- 16) G. バタイユ, 山本功訳: 文学と悪, 現代文芸評論叢書, 紀伊国屋書店, p. 88
- 17) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 265 (*Four Zoas*)
- 18) G. バタイユ, 山本功訳: 文学と悪, p. 84
- 19) Kathleen Raine: *William Blake*, p. 28
- 20) Mark Schorer: *William Blake, The Politics of Vision*, A Vintage Book, 1959. p. 38
- 21) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 98 (*All Religions are One*)
- 22) *Ibid.*, p. 775) *Annotations to Reynold*)
- 23) 狐野: William Blake の神と人について, 北海道英語英文学第12号, 昭和42年, p. 25 参照
- 24) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 472 (*Annotations to Reynold*)
- 25) *Ibid.*, pp. 664-665 (*Jerusalem*)
- 26) *Ibid.*, p. 709 (*Jerusalem*)

- 27) Blake の Imagination については、狐野： William Blake の Imagination についての一考察（室蘭工業大学研究報告第5巻第2号，昭和41年）参照
- 28) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, pp. 155-157 (*The Marriage of Heaven & Hell*)
- 29) 狐野： W. Blake の予言詩 *Milton* について，室蘭工業大学研究報告（文科編），第6巻，第1号，昭和42年，p. 57 参照
- 30) Mark Schorer: *William Blake, The Politics of Vision*, p. 295.
- 31) *Ibid.*, p. 32
- 32) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 480 (*Milton*)
- 33) *Ibid.*, p. 773 (*Annotations to Berkeley's Siris*)
- 34) *Ibid.*, p. 264 (*Four Zoas*)
- 35) Albion について Damon は次のように説明している。

ALBION is a common poetical name for England. When the Trojans land on the rocky shore of Albion, they call it "mother" (PS, *King Edward the Third* vi: 14). Thereafter, through the minor prophecies, Blake used "Albion" simply as the name for England, without reference to gender. About 1793, he added a couple of lines to his engraving, the so-called "Glad Day", in which he gave the name of Albion to the dancing youth who symbolizes the politically awakened England. Eventually Blake learned that "Albion" was the name of the aboriginal giant who conquered the island and renamed it for himself. ... (S. F. Damon: *A Blake Dictionary*, Brow Univ. press, 1965, p. 9)

又、Denis Saurat の *Blake & Modern Thought* によると 18 世紀に Adam は Druid 人で英国に住んでいたという説がまじめに discussion されたということである。従って Blake も彼の神話をつくるのにあたって、当然この説をとり入れたものと思われる。Saurat は次のように説明している。

Naturally, Blake adopts the extreme form of the theory. Mankind was born in the West. Adam was a Druid. Consequently Blake calls him Albion. The Druids were therefore the first of men, the founders of civilization and of religion. (Denis Saurat: *Blake & Modern Thought*, Russell & Russell, 1964, p. 63)

- 36) G. Keynes: *The Complete writings of William Blake*, p. 609 (*Last Judgment*)
- 37) J. G. Davies: *The Theology of William Blake*, Oxford, 1948, p. 97
- 38) Urthona について Damon は次のように説明している。

"Urthona... may come from Ossian's character 'Urthono'; from 'Earthern, with sonorous vowel changes... or... Ur and Thon, original clay.' Since his symbol is earth, it may simply be 'Earth-owner'. He is the regent of the world of spirit, the highest of the four Zoas. Los, the spirit of poetry, is only his temporary form in this world. (S. F. Damon: *William Blake: his Philosophy*



and Symbols p. 326)”

- 39) Urizen について Damon は次のように説明している。

“Urizen’s name is composed of the two words ‘Your Reason’. (*Ibid.*, p. 331)”  
 そうして、更に、“…but Kathleen Raine and others prefer to derive it from the Greek *ὀριζεν* (“to limit”), which is the root of the English “horizon”. However, it is not certain that Blake knew Greek as early as 1793, when he first used Urizen’s name. (S. F. Damon: *A Blake Dictionary*, Brown Univ. Press, 1965, p. 419)” といっている。Witcutt も Damon の説をとっているようで、“His name Urizen seems to be derived from the word “reason”. (Witcutt: *Blake, A Psychological Study*, Kennikat Press, 1946, p. 35)” といっている。Damon は又、“Many times Blake identified Urizen with the Jehovan of Exodus. (S. F. Damon: *William Blake: his Philosophy and Symbols*, p. 332) といっている。

- 40) Damon は Luvah について次のように説明している。

“He is the Prince of Love; his name might be derived from “lover.” Love is the greatest of the emotions, and Luvah includes all of them, especially its contrary, Hate. (S. F. Damon: *A Blake Dictionary*, p. 255)”

- 41) Damon は Tharmas について次のように説明している。

“Tharmas, the western Zoa, represents the Body and the senses. His name was undoubtedly derived from Tamas (Tama, or Tamasee), the Hindu name for Desire. Blake had been reading the *Bhagavat-Geeta* (London, 1785), and had been so impressed by it that he made a water colour drawing of *The Brahmins—Mr. Wilkin translating the Geeta* (No. 84 in Rossetti’s list of Blake’s paintings). In Lecture xiv of this book is a description of the three ‘Goon’: ‘*Satwa* truth, *Raja* passion, and *Tama* darkness; and each of them confineth the incorruptible spirit in the body’ (p. 107). From other references to the Goon, it appears that they correspond almost precisely to the three lower Zoas: *Satwa* being Urizen, *Raja* being Luvah, and *Tama* being Tharmas. The fourth and highest Zoa, Urthona, is the ‘incorruptible spirit’ in the passage quoted above. Needless to say, Blake thought more highly of the Goon than the Brahmins: he desired a harmony of the four Zoas; they sought the subjection of three to Urthona. (S. F. Damon: *William Blake: his Philosophy and Symbols*, p. 365)”

- 42) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 500 (*Milton*)

- 43) Damon は Zoa について次のように説明している。

Zoa is a Greek plural which Blake used as an English singular. In *Revelation* (iv:6, etc.) it is awkwardly translated “beasts.” John the Divine on Patmos saw the four beasts (*Rev* iv; v; *FZ* viii:600; *Mil* 40:22) standing about the

throne of the Lamb. They worship him and sing a new song. Each beast thunders "Come and see," revealing in turn the Four disastrous Riders of the Apocalypse. "One of the four beasts gave unto the seven angels seven golden vials full of the wrath of God" (*Rev* xv:7), which are poured out on mankind.

These beasts are the same four "living creatures" (Chayot Hakodesh) which Ezekiel beheld by the river of Chebar (*Ezek* i:5 ff.; *J* 12:58). They have complicated eyed wheels within wheels, which revolve independently and act as the chariot of Deity.

In conventional iconography they have respectively the face of a man, a lion, an ox, and an eagle (*Ezek* i:10; *Rev* iv:7), and commonly identified with the four evangelists. However, before Ezekiel, the huge statues of the guardians of the Assyrian palace gates were sculptured with the face of a man, the head of a lion, the wings of an eagle, and the body of an ox.

Blake identified them with the four fundamental aspects of Man: his body (Tharmas—west); his reason (Urizen—south); his emotions (Luvah—east); and his imagination (Urthona—north). ... (S. F. Damon: *A Blake Dictionary*, p. 458)

- 44) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, pp. 277-278 (*Four Zoas*)  
 45) *Ibid.*, p. 500 (*Milton*)  
 46) J. G. Davies: *The Theology of William Blake*, p. 98.  
 47) Nietzsche: *Die Fröhliche Wissenschaft*, Alfred Köner Verlag p. 140.  
 狐野: 人間の主体性について, 室蘭工業大学研究報告, 第5巻, 第1号, 昭40年参照  
 48) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 149 (*The Marriage of Heaven & Hell*)  
 49) 寿岳文章訳: ブレイク抒情詩抄, 岩波文庫, 昭和6年, p. 71.  
 50) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 613 (*Last Judgment*)  
 51) *Ibid.*, p. 712 (*Jerusalem*)  
 52) *Ibid.*, p. 481 (*Milton*)  
 53) *Ibid.*, p. 743 (*Jerusalem*)  
 54) W. P. Witcutt: *Blake, a Psychological Study*, p. 13  
 55) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 264 (*Four Zoas*)  
 56) Lafcadio Hearn: *On Art, Literature and Philosophy*, 北星堂, 昭和16年, pp. 115-127.  
 57) K. Raine: *William Blake*, p. 29  
 58) Damon は次のようにいっている。

"By the word 'Prophet' he (=Blake) did not mean one who foretells the future. He believed that true Prophets were simply poets who beheld that eternal truths by power of Imagination. (S. F. Damon: *William Blake; his Philosophy and Symbols*, p. 61)"

- 59) T. S. Eliot: *Selected Essays*, Faber and Faber Limited, 1966, p. 322

- 60) 吉田健一訳： ウイリアム・ブレイク，エリオット全集 IV 詩人論，中央公論社，昭和35年，pp. 58-59.
- 61) G. Keynes: *The Complete Writings of William Blake*, p. 472 (*Annotations to Reynolds*)
- 62) *Ibid.*, p. 624 (*Jerusalem*)